

川の立体交差九ヶ所のまち 白岡川物語

埼玉県白岡市
白岡市観光協会

白岡市の中を多くの用排水路が流れていることには深い歴史的背景があります。その代表的な史実と河川・架橋を紹介しします。



元荒川

用排水路の歴史物語

徳川家康入府時の関東平野の様子

徳川家康が入府する天正18年(1590)以前の関東平野は、利根川と荒川が乱流して江戸湾に流れ、広大な低湿地が形成されており、人々の安定した生活を維持するには不適な土地でした。そこで幕府は、江戸初期と中期に大規模な河川改修を行っています。

利根川と荒川の改修

白岡市に影響を与えた河川改修は、伊奈忠次・忠治父子による利根川と荒川の改修です。利根川の改修は、文禄3年(1594)忍城を洪水から守るため、川俣(羽生市)で会の川(利根川本流)を締切り北側に位置する浅間川に付け替えたのを皮切りに、60年間で合計6回もの改修を繰り返し、承応3年(1654)忠治が利根川を銚子で鹿島灘に流下させたものです。この利根川の改修により白岡市を流れていた日川(にっかわ)の流量は激減しました。日川は「図-1」のように川崎(羽生市)で会の川から分岐し「図-2」のように白岡市の中心部を流れる大河であり、中世では太田庄と騎西部の境でした。荒川の改修は、当初現在の綾瀬川の川筋を流下していた荒川を忠次が、慶長年間小針領家(桶川市)に備前堤を築き、今の元荒川筋に導きました。その後、忠治により寛永6年(1629)久下(くげ、熊谷市)で荒川が締切られ入間川筋に付け替えられたため荒川本流は元荒川になり、県東部低湿地は開発への基盤が整いました。



図-1 利根川の東遷



図-2 日川流路詳細

1 元荒川	7 隼人堀	10 備前堀
2 野通川	8 姫宮堀	11 柴山沼
3 星川	9 庄兵衛堀	12 血沼
4 古川		
5 白川		

日川(にっかわ)流路跡地の新田開発

当市では日川流路跡地を開発し新田にするため多くの排水用河川が開削されました。その内、一級河川は備前堀川・姫宮落川・庄兵衛堀川・隼人堀川・野通川で、普通河川は高岩落川・三ヶ村落堀など多くの排水用河川です。

見沼代用水堀削と川の立体交差群の出現

享保元年(1716)八代将軍になった吉宗は、幕府の財政を立て直すため「享保の改革」を行いました。その一環として米の増産を図るため沼や低湿地を干拓し新田にしました。その代表的なものが見沼溜井の干拓と見沼代用水の開削です。井澤弥惣兵衛に命じ東浦和から東大宮にまたがる1200ha(町)の見沼溜井を享保12年(1727)に干拓し、この水に代わる用水として開削されたのが見沼代用水です。見沼代用水は、利根大堰(行田市)付近で取水され、その直線距離は60km、総延長80kmで灌漑面積は14000ha(町)に及んでいます。その工期が享保12年(1727)8月から翌年の春にかけ半年で行われているのも驚嘆すべき点です。当市では、見沼代用水の支川の黒沼笠原用水により灌漑されていますが、用水は田に給水するため排水用河川より数m高い位置を流下します。そのため、江戸時代初期に日川跡地を新田にする目的で、多くの排水用河川が開削されていることから見沼代用水の本支川と排水用河川が立体交差することになりました。



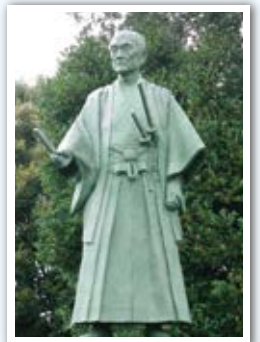
川のことば物語

伊奈備前守忠次

江戸時代初期の地方巧者(優秀な地方行政官)の土木技術者。伊奈家の先祖は信州の熊倉城主。忠次の祖父忠基の時、家康の父松平広忠に仕えていました。天正10年(1582)本能寺の変が起きた時、家康一行は泉州堺で観光を楽しんでいました。しかし、堺より数日間「神君伊賀越え」を実行し伊勢の白子湊で、船を仕立て岡崎に逃げ帰りました。その時、従う者30余名でその中に伊奈忠次もおり家康から信頼された存在でした。天正18年(1590)小田原の北条氏が亡んだ時、秀吉は洪水の巢といわれる関東平野に家康が三河国から国替することを命じました。徳川家臣団は非常に怒りましたが「関東平野はやり様によっては新天地になる」と皆をなだめたのも忠次でした。忠次は家康入府後、武蔵野国小室(埼玉県伊奈町)に1万石の所領が与えられ代官頭となり、息子忠治は初代の関東郡代として天領25万石を支配しました。

井澤弥惣兵衛為永

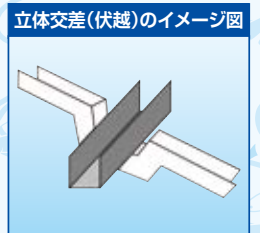
江戸中期の優れた土木技術者。後に勘定吟味役(副勘定奉行)となり「紀州流」河川改修術の創始者でもあります。弥惣兵衛は、紀州溝口村に生まれ幼少から数学に精通し紀州2代藩主徳川光貞に仕え吉宗の次の藩主宗直まで5人の藩主に仕えました。吉宗が八代将軍になり「享保の改革」の一環として行った米増産のため新田開発の責任者として江戸に呼び出されたのが享保7年(1722)60才の時です。それから76才で亡くなるまで16年間、新田開発のため日本中を飛び回りました。下総国飯沼開墾を手始めに見沼代用水の開削、越後国紫雲寺湯の干拓、江戸川・中川・多摩川の改修工事と多くの新田開発を成功に導いています。



井澤弥惣兵衛立像
(さいたま市見沼自然公園)

伏せ越し

排水用河川と用水(常に排水用河川より高い位置を流下)あるいは2本の排水用河川が交差した時の河川の管理方法。その目的が田に水を供給するあるいは1本の川に排水を集中させないなど明確な場合、2本の川を立体交差させお互いに干渉させない様「伏せ越し」という構造物を作り、川を立体交差させています。江戸時代は、一方の川を他方の下に木製の樋管で潜らせ立体交差させていました。これは、流体を低い所に落とし元の高さまで押し上げることが出来る連通管の理論を応用したものです。



立体交差(伏越)のイメージ図

掛け樋

これも2本の川を立体交差するための方法です。特に、舟運を必要とする川に設置するもので川に橋を架け道路の代わりに水路を載せる方法です。「柴山伏越」も享保13年(1728)に完成した時は、舟運を確保するため「掛け樋」が併設され船は須戸橋(行田市)まで遡上しました。しかし、「掛け樋」は洪水時の管理が難しく完成後32年間で廃止され、終着は柴山橋戸(白岡市)となりました。



立体交差(掛け樋)のイメージ図

橋物語り

白岡市には自然河川や多くの用水路・排水路が東南流しています。ここでは、市内の幾つかの橋について紹介します。

義理橋 (ぎりばし=ぎらばし)

隼人堀川に架かる橋で、岡泉地区にあります。江戸時代に将軍が日光社参の御成道を通る時に、地元の人は岩槻境まで行き、将軍の一行を出迎え、今度はすぐに義理橋を通して岡泉の外れまで先に行き、一行を見送ったので「義理を果たす」というので名が付いたといえます。

鷹匠橋 (たかじょうばし)

この名の橋は野牛地区と西地区にあります。いずれも鷹匠(江戸時代の職名で将軍の鷹を預かって訓養して、鷹狩の仕事に従事した役)の便を図るために造られたものです。

八幡橋 (はちまんばし=やわたばし)

元荒川の西地区に位置し、対岸は蓮田市貝塚で、以前この地は「八幡の渡し場」がありました。明治43年に白岡駅が開業を始め、駅周辺の商家を中心に近隣の有志の援助を受け、大正12年に「八幡橋」を架けました。現在の永久橋は平成6年に架け換えられたものです。



八幡橋(はちまんばし=やわたばし)

渡し場物語り

元荒川の渡し場(もとあらかわのわたしば)

元荒川には、「八幡の渡し」「茅野の渡し」の二か所の渡船場がありました。八幡の渡しは現在の八幡橋付近で、渡しの仕事は「かっしの家」の屋号で呼ばれる早川家で行っていました。大正12年に八幡橋が完成したので廃止になりました。



八幡橋開通式(大正12年6月1日)



河川立体交差物語り

白岡市には主な29本の川が流れ、その内7本が一級河川です。また、約5km四方の市内に柴山伏越を始め川の立体交差が9ヶ所あります。これは全国的にも非常に珍しく、多くの河川改修の歴史により実現したもので、白岡市の特徴を良く表したものとと言えます。

市内の主な河川

一級河川	1	元荒川
	2	野通川
	3	星川
	4	備前堀川
	5	姫宮落川
	6	庄兵衛堀川
	7	隼人堀川
普通河川	8	高岩落川
	9	新堀
	10	見沼代用水
	11	笠原沼用水(百間用水)
	12	黒沼用水
	13	三ヶ村落堀

河川の合流地点

a	元荒川と野通川の合流点
b	元荒川と星川の合流点
c	隼人堀川と庄兵衛堀川の合流点
d	隼人堀川と三ヶ村落堀の合流点
e	隼人堀川と新堀の合流点



1 野通川・隼人堀川の立体交差
2 見沼代用水路・隼人堀川の立体交差



3 元荒川・見沼代用水路の立体交差



4 星川・隼人堀川の立体交差



5 隼人堀川・黒沼用水路の立体交差



6 黒沼用水路・三ヶ村落の立体交差



7 新堀・黒沼用水の立体交差



8 姫宮落・百間用水路の立体交差



9 高岩落・百間用水路の立体交差

